

〈実践報告〉

ジャンルを超えて — 工芸から美術表現へ

三 木 陽 子

はじめに

自身の制作研究を今日の社会環境の中に位置づけて考察する。制作研究とは個人的な表現内で完結するものではなく、社会との関わりの中で発展させ、成熟させるものである。それには自身を取り巻く環境について新たなる見解を持ち得ることが必要であろう。そして創作への欲求・動機が個人的な強い思いであるが故にそれらを如何にしてこの時代における明解なビジョンに育て上げて行くのか、そこには何が必要なのか — 教育者の立場である作家が自身の作品を世に送り出す行為は大学教育での新たなる芸術家の育成、中学高等学校の美術教育の中で生きる力となる為に自らが長年継続して築き上げた学びを教育に生かし伝えることを目標にする。

1. 自作「TUBE LIFE」について

この数十年の間、私は身体やプリミティブなものについて思考し、それを出発点に芸術作品が成せる他者との新しいつながりを模索してきた。それは現代のデジタル化にともなう虚像の氾濫から身体を取り戻す試みであった。美術家が作品を他者へ繋ごうとする時、それぞれのやり方で自分の体験や記憶を誰かとともに共有したり再現したりすることが重要である。そして私はそのような未知の感性との出会いが大きな刺激となり、世の中に作用する広がりを生むと考えている。

私は陶芸を表現手段とし、闇と境界をテーマに作品制作を続けている。私の闇のイメージは決して暗く絶望的な虚無なものではなく、生命の息遣いや感触、個ではない意識、それらを包括する根源的な全てである。そして人はその無意識の領域と意識の両方の世界の中で生を享受している。無意識の世界とは自分ではコントロール出来ない予測不可能な自然



写真1 TUBE LIFE 京都芸術センター 2004



写真2 TUBE LIFE YOD Gallery 2011

の世界であり、意識の世界とは人が人の為に創造した常に目的を持ち、コントロールする為の世界であり、予測不可能なことが起こらないようにする人工の世界だと考える。

私はある時期からその二つの世界の境界を表現しようと思い至った。2004年に京都芸術センターで開催された「TUBE LIFE」はそのような思考の流れから生まれた自身の代表作である。

その世界を表現する為に日常においてはみ出した存在の配管や排水溝をデフォルメし、それらを闇への入り口とし、同時に異世界からの出口として設定する。そして管は人間の体内にもあるものだと考えた私はそれを自分の表現の主なる要素に取り入れることに辿り着いた。なぜ配管かと問われれば、陶は制作する時に中を空洞にしなくてはならない為、そのイメージが自然に結びついたのかもしれない。そしてその

世界を表現する上で、人が不潔なイメージを持つネズミを衛生的なイメージの浴室のシャワーや洗面台などのオブジェに取り付けたり、また同じ動物でも人間と生活を共存している犬を登場させたり、様々なイメージを追加し、意識/無意識、光/闇、生や死の相反する概念を一体化する装置的な役割を持つ作品を作ることをこの展覧会をきっかけに目指すようになる。

この京都芸術センターの公募は与えられたテーマが、How would you make the world better? というものだった。この問いに対し、当時の私は次のように述べている。「人は快適さを求めるあまり、どんどん合理化をはかり、不必要と判断したものを淘汰し続け、その結果、進歩といわれるものがあるのかもしれない。しかし、さまざまな情報の氾濫とそれに操作され、管理される私たちの今の時代が決して健全でないのも事実である。そう考えると排除されたものや、無駄と判断されているものの中にもっと大切なことがあるのではないだろうか。そのような思いから、必要なものを供給し、また不必要なものを排除する、ある時は生を与え、死を与える管をコンセプトに「TUBE LIFE」を制作する。」



写真3 MUZZLE 麻布十番ギャラリー 2008

2. 触覚について

私をはじめて粘土に触れた頃から10年くらいは、なにかを表現したいというより、自意識の過剰さをもてあましており、ひたすら柱のような筒状の形態を作り、その表面にオートマティックな手法で土の増殖的な装飾で覆い尽くすという身体性の強い大きな作品ばかりを、夢中で制作していた。80年代に一大ムーブメントとなったニューペインティングなどのアートシーンの影響も勿論あったが、衝動を感受する触覚性はその当時の私を魅了していた。

陶芸ほど素材の土と手が、直接触れ合う芸術も少なく、陶芸は手で考える表現ともいわれている。そのためか目的をもたずに漠然とつくとエロティックな有機的な形態になり、それは教育の現場で、触覚をテーマに即興的に作品を制作する課題を与えた場合においてもその傾向は殆どの受講者に見受けられる。

触覚は外部世界を知り、自分自身を知る感覚であり、同時に外部世界と自分の内部との境界線を感じる感覚である。触覚の器官は皮膚であり、皮膚は身体の全てに広がっており、その感覚はとくに手や指が先駆けとなるものであるが、現代の技術の進歩は手仕事から私たちの手を解放した。

しかしながら、生命を生むエロティシズムの役割も果たすということを考えるともっとも無意識の世界との原始的な結びつきをとどめている感覚であるといえよう。人間には五感があり、視覚と聴覚は客観的、嗅覚と味覚は主観的、触覚はその両方の感覚を持ち得ている感覚と言われているが、まさに触覚は外部と内部を結びつける、何かを触った時、同時に自分の内部も感じるという無意識と意識を結びつけることのできる純粹で、根源的な感覚である。それは本能により、創造を行う際に無意識の深部へ誘う感覚であり、もっとも芸術の機能に適した感覚である。



写真5 Before Dark なうふ現代ギャラリー 2011



写真4 黒い手「導管」岐阜県美術館 2017

昨今、美術、図画工作の教育現場では鑑賞教育が非常に重要な要素のひとつになっている。表現するだけでなく、鑑賞することにより、自分の心で感じ取り、直感的に美術作品を味わう感性を培うことができるからだ。

その中で触察という鑑賞法がある。それは目で見るのではなく、手で触れることによ

り彫刻作品やオブジェを味わうという方法である。過去に目の不自由な人の鑑賞会において私の作品もその対象に選ばれたことがあったが、鑑賞者が手の平で鑑賞する姿は手で見ることの可能性の広がりを知らせてくれる。触覚のみならず、五感を働かせ、対象を捉え、素材の感触を得ることは作品を理解する上で非常に重要な要素である。

3. 空間・展示イメージについて

私は自分の内にプリミティブな感覚が強くと感じ、古代のデコラティブな壺や装飾品（何かわけがわからないけれど力のあるもの、おそろしいものと一体化していた頃のもの、精神と物質が結びついていた頃のもの）の魔術性を、今現在自分が生きている時代の日常のリアリティーとうまく結合し、機能させたいと願った結果、日常を異化し、場をつくる表現に移行していく。

その表現の特色は生理的な混沌や生命感を直接的に見せる作品ではなく、現代のモノ（工業製品等）のイメージに根源的な生命（生き物等）のイメージを入れ込み、そして、陶芸ならではの焼く行為により、より一層その質感や存在を無機質な物質に変換していく。その方法は逆説的であり、自分の手を使い制作するにもかかわらず、敢えてそれらを機械生産品のイメージに近づけ矯正することにより、根源的なものをより一層強く感じさせる表現になるように努めている。出来上がったものは、一見美しく整然とした安全なものに映る。しかし、しばらく見ているうちになにかじわじわと人に沁みていき、別の感情や思考を想起させるような表現を目指している。



写真6 Shower baby なるふ現代 2011



写真7 白昼夢 麻布十番ギャラリー 2008

自身にとって空間は非常に重要である。そこから作品のさまざまなインスピレーションを得る。これまでもいわゆる美術作品を展示する公的な美術館、ギャラリー以外の場所、それはホテルや住宅などさまざまであるが、それぞれの空間のイメージに合わせて展示を行ってきた。

2007年の京都での個展会場であるヴォイス・ギャラリー psf/w はホワイトキューブのギャラリーである。そこで「Kitchen」というタイトルの展覧会を行った。食べることは生と死の一体化であり、それをイメージする場所ということで、異化したテーブルウェアなどを展

示する。〈食べる〉ことは生きていくために必要で、身体的な餓えを満たすためだけではなく、精神の欲望、喜びや快楽を伴う生に対してポジティブな行為であるが、その反面、〈食べる〉行為は残酷でもあり、また、現代社会では様々なネガティブな問題も抱えている。生と死が一体で、エネルギーが変換される場——闇や境界をテーマにしている私の制作の流れから、自然にイメージが湧いた。その時の展示の様子は壁面にはタイルの破片や配管を張り巡らし、中央の黒のテーブルの上に器や皿などの食器を積み重ね、周囲にはタオル掛けやガスコンロ等を配置した。全て白黒の陶で統一した。



写真8 Kitchen ヴォイス・ギャラリー psf/w 2007

一見何事もないようにみえるが、よく見れば、ネズミが走り回る皿や、虫が這うトウモロコシ。タオル掛けも二人の子供の頭部がタオルをくわえているなど有機物と無機物を融合させ悪夢の様相を展開した。しかしその中には日本土壌のアニミズムも含ませるなど、意識/無意識のみならず、様々な価値観やそれらの両義性を繋ぎ止める日常と地続きのファンタジーを描いた。



写真9 耳枕 ギャラリー揺 2009

2009年の京都の和空間で行われた揺ギャラリーでは〈眠り〉をテーマにする。和室に布団を敷いてそこに寝ている人がいるような、いないような、夢、不在感、無意識の世界を表現する、枕に耳がついている「耳枕」という作品を展示する。

2010年のINAX ガレリアセラミカでの個展ではガラスケースのある直方体の小さな空間で「PET SHOP」を発表する。これまで私は水道管などの管を生や死を与えるイメージとして作品に取り入れてきた流れもあり、私がペットショップでもっとも興味をひかれたペットボトルのウォーターノズル（水飲み器）をペットショップの象徴的な存在として、モチーフにする。ペットは愛玩物であり、家族でもある存在だが、その生命が売買される場所、ペットショップの存在は境界をテーマに表現している私にインス



写真10 PET SHOP
INAXガレリアセラミカ 2010



写真11 PET SHOP
INAX ガレリアセラミカ 2010

ピレーションを与え、全てを人に委ねなければ存在できない生命を表現する。

2011年なうふ現代ギャラリーでの個展「Before dark」、2013年「公園」の個展に引き続き2014年の台湾国際セラミックス・ビエンナーレにおける新北市鶯歌陶磁博物館での発表。2017年の岐阜県美術館でのART IN THE CUBEにおける「導管」の展覧会では「TUBE LIFE」の展開を行い、生命の気配やざわめきや感触、その全てを包括する暗闇に向かう刻を表現した。

そのように現在迄様々なテーマで発表をしてきた。私は現実の中にすでにあるけれども、言葉にされないために気づかれないでいる何かを見つけ、それを掘り出す。そして想像力や空想の力を用いてそれに表現を与える。

その思想は20世紀初めに登場したシュルレアリスムに非

常に近く、表現したいのは現実の中にあるもの、現実の中に内在し、連続しているものである。決して自分だけの閉ざされた主観に基づく個人的な幻想の世界を描こうとしているのではない。そしてそもそも私たちが現実と言っているもの自体が真実なのかという問題もある。つかみどころのない時間空間の中に現実と称せるものを見つけ出して都合をつけている現代社会。だからこそそのような曖昧な現実と呼ばれるものの中に見たことの無い未知の驚



写真12 Before dark なうふ現代ギャラリー 2011

きを呼び起こす新たな現実があらわれる可能性は十分に起こりえる。人間は生や死などそのすべてを包括する自然をコントロールしたいと願い、矯正する作業を行った。そしてそれは今も続いている。私はそのような自分が生活している日常を考え、今生きている時代を表現するにあたって、実体である物をつくり、さらにそれを使って場をつくることにより、逆にこの世にはないものを喚起させるような作品を制作し続けたいと思っている。

おわりに

工芸というジャンルはあらゆる可能性を秘めている。例えば陶芸の場合、熟練した職人の手による伝統工芸にはじまり、プロダクトデザインによる器から建築に関わるあらゆる産業、そして個人作家による自由な陶芸表現など沢山の在り方がある。どの方向性を選び、何を望むかは個人の自由であるが、ひとつの方向性を追求することにより、その枝葉をまた別の方向性へと広げていきやすいのもその魅力のひとつであろう。

私は前述したように強い美術志向のもとに現在の作品に至っているが、そこから様々な方向への広がりもある。工芸なのか、美術なのか、デザインなのか、その問いを受けることは、過去に多くあったが、それはそれらの可能性を全て含むという褒め言葉と捉えている。ありとあらゆるクリエイションが、ジャンルを超えて交感し合い、素晴らしい文化創造へと導かれるよう努力すべきことを作家として、また教員として真摯に受けとめている。

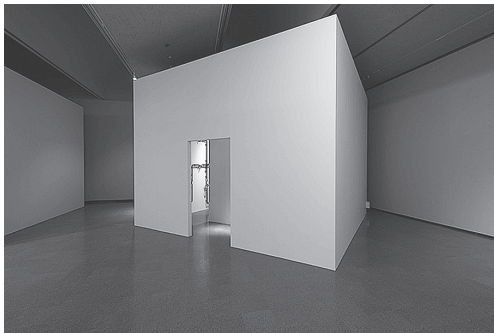


写真13 ART IN THE CUBE「導管」(外観)
岐阜県美術館 2017

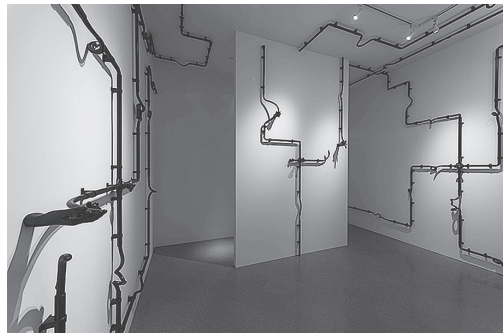


写真14 ART IN THE CUBE「導管」(内部)
岐阜県美術館 2017

写真 2, 5, 6, 9, 12 photo by Hiroshi OHNO

写真 3, 7 photo by Jiro HIRAYAMA

写真 8 photo by Miho FUJIBA

写真 13, 14 photo by Kaoru MINAMINO

